

林業家による教材研究—1枚の写真を通して

## 木の命に感謝する（下）

作成：波多野達二（はたの たつじ／林業家，元小学校教諭）

寸評：山下宏文（やました ひろぶみ／京都教育大学 教授）\*

語り：「これは雲ヶ畑中学1年生J君の《大木の涙》という作品です。作品のタイトルを見て、「あれ、もしかしたら」と思いませんでしたか。そうなんです。この作品は、前回お話しした樹齢400年の杉の端材で作上げた作品なのです。端材というのは、木材市場に持っていかなかった余りの木です。中学1年のJ君は、余りの木で、こんなすごい作品を作上げたのです。この400年の木は、中心部分がかなり腐っていて、J君は腐った部分を全部抜き取ってしまいました。すると、その形が人の口に見えてきました。そして、枝を切り取って、その節のある断面を目として取り付け、枝を上部に差し込んで髪の毛を作り、最後に涙の雫を表現しました。J君に聞いてみると、この涙は、いつも通学のときに僕たちを見守ってくれていた大木の涙だということでした。しかし私には、大木は涙を流しながら喜んでくれるように思えてなりません。昔、この村では、お風呂を焚くのも、ご飯を炊くのも、みんな薪を使っていました。一本の木で、捨てる場所は何もなくありませんでした。でも今は、電気やガスのエネルギーに頼っていて、こんな大木の端材でさえ、山に捨てて腐らせてしまいます。J君たち中学生



◀泣いているのか、うれし泣きか…

は、そんな大木の端材に、命をもう一度吹き込んだのです。もしかしたら、大木の涙は悲しさの涙じゃなく、感激の涙だったのかもしれない。」

意図（波多野）：「もったいない」という言葉が、最近、注目されている。大量生産、大量消費の飽食の時代にあって、子どもたちは、しだいに「もの」を大切にすることを失っているのではないだろうか。このJ君の作品は、筆者が地元の雲ヶ畑小中学校の木工教室の講師として招かれ、そこで出来上がってきた作品である。子どもたちは、大木の端材の中から、心に留まった部分を大人に伐り分けてもらい、その木で、こんな作品を作ったのである。自分たちを見守ってくれた樹齢400年と対話し、木からインスピレーションをもらいながらの製作だった。「このままでは、木がかわいそう。木を大切に使いきりたい」。そんな、あの子たちの想いが、もう一度、森を見つめ直すきっかけになってくれたらと思っている。

寸評（山下）：森林環境教育において、木を伐ること、そして木材を利用することと樹木の生命を感じ、それを大切にすることとの間にある溝をどう埋めるかという問題は、極めて重要である。そこに、森林環境教育の本質があるといってもよい。本教材を通して、まさにこの問題に迫っていくことができるのではないだろうか。

\* 山下…〒612-8522 京都市伏見区深草藤森町1 Tel 075-644-8219（直通）